

校長ことマヘンドラ・グプタの略歴

マヘンドラ・ナート・グプタは、西曆一八五四年七月十四日、金曜日、ベンガル曆一二六一年アシヤル月三十一日、ナーガ・パンチャミー（クリシュナが蛇・カーリヤを退治したことを祝う祭）の日に、カルカッタのシムリヤ地区シヴァナラヤン・ダース通りに生まれた。父の名はマドゥスーダン・グプタ、母の名はスワルナマイー・デーヴィー。マドゥスーダンは信仰心の篤い人物で、そのことはタクルも知っておられた。マヘンドラ・ナートはマドゥスーダンの三番目の息子である。父親がシヴァ神へ十二回、礼拝供養することを誓った後にこの子は生まれたということである。そのため父はこの子を可愛がり、身心共に何の間違いも起こらないようにと、特別に注意して育てた。マヘンドラ少年は大そう性格の良い子供で、また両親に対して従順で親孝行であった。彼はごく幼少の頃のことを記憶していて、それを人に話すことができた。——たとえば五つするとき、母に連れられてマヘーシヤの山車祭ラタヤトウを見に行った。その帰り途に、彼らの舟は南神村の沐浴場に立ち寄った。舟に乗っていた人々が皆、寺院内の神々を参拝するため忙しく歩き回っていたとき、彼はどういわけかカーリー堂の向かいにある舞楽堂ナト・ブディルでたった一人になってしまつて、母親を見失つたと思つてシクシク泣いていた。このとき、ある人が彼の泣いている姿を見て、慰めて泣きやませてくれた。マヘンドラ・ナートは言っていた——

「その出来事は、胸に鮮やかに印象づけられていて、いつももありありと思い浮かべることが出来た」と。彼は心の目で、最近建立された白く輝く寺院をはっきりと胸に思い浮かべることができた。そして後になって、彼を慰め安心させてくれたそのお方はいは、大聖タクル、ラーマクリシユナ、その人ではなかったかと思っていた。

マヘンドラ・ナートは子供時代、ヘアー・スクールで学んだ。彼はことのほか賢く、記憶力のよい生徒だった。そして試験のときは、いつも一番か二番の成績だった。学校への行き帰りの途すみちがらには、ターンタニヤのシータラー・マーター寺院があった。この寺は大学通りの市場マールケットの向かいに建っている。彼は行き帰りにこの寺の正面に立って、女神を礼拝するのが常だった。生来の頭の良さと真面目な努力によって、彼は進級試験、F・A、B・Aの試験、それぞれに奨学金と賞状を授与されながら学業を進めていった。進級試験では二番の成績だった。F・A試験の時などは、数学の準備を少しもしなかったのに五番の成績だったし、一八七四年のB・A試験では、三番で通ったのである。プレシデンシー・カレッジで彼は、トゥニー教授に大そう目をかけられ愛された。在学中の一八七四年に、彼はケーシャブ・センの従兄弟いとこであるタクルチャラン・センの娘、シユリー・マティー・ニクンジャ・デーヴィーと結婚した。この妻にも、タクルシユリーと大聖母シユリー（ホーリー・マザー）は大そう愛情を注いで下さったものである。息子を亡くした悲しさのあまり、妻が気が狂いそうになった時などは、タクルは彼女の体を手でさすって心を落ち着かせて下さった。

教師の仕事に就く前に、彼は少しの間、公務員をしていた。その後で会社勤めもしてみたが、こういっ

た仕事は皆、長続きしなかった。神は彼に、別の人生を用意されていたのだった。やがて教師の仕事についた彼は、リボン、シテイー、メトロポリタン・カレッジで英語と心理学と経済学を教えていた。西暦一八八二年にタクルのところへ通いはじめたときは、シャームバザール・ヴィディヤサーガル高等学校シャームブクル分校の校長をしていた。

ラカール、プールナ、バブラーム、ビイノド、バンキム、テジチャンドラ、クシーロド、ナラヤン等、タクルに親しんだ信者たちは、この学校の在校生か卒業生である。したがって彼等は、マヘンドラのことを校長先生と呼んでいた。そんなわけで、後に聖ラーマクリシュナの信者たちの間でも、マヘンドラ校長、或いは校長先生という呼び名で通っていた。タクルまでも彼のことを、校長、マヘンドラ校長と呼んでおられた。ラーマクリシュナに多くの出家弟子や家住の信者を最初に紹介したのは、校長先生であった。ギリシユ・ゴーシユはこのことに注目して、「これらのことはすべて、校長がしたことだと思ふ」と言っていた。

マヘンドラ・ナートは、宗教に向かう精神的傾向を子供のころから持っていた。そのため、有名なケーシャブ・センの宗教運動、および彼の創立したナビダーン・サマージ(新撰理協会)にも参加した。マヘンドラ・ナートはこの時分、ケーシャブと行動を共にしていたのである。自邸やナビダーンの教会における礼拝集会にも出席していた。その当時は、ケーシャブ・センが彼の理想の人物であった。「あの感情的な祈りの言葉を聞いているとき、私はあの方を神々の位にあると感じた」と彼は人に語っている。また、こう言っていたものだ。「あとになって、タクルのところに行ってお話を聞いて、ケー

シヤブのあの人の魂を魅する雰囲気を、タクルールのところから得ていたことを知ったのだった」

一八八二年二月二十六日、マヘンドラ・ナートは南神村ドツキネーシヨルのタクルールのところへ行った。彼に会われるとすぐ、タクルールは彼のすぐれた素質をお認めになった。最初に会った日、タクルールは彼と別れるとき、「また、おいで」とおっしゃったのである。また、彼が既に結婚していて数人の子供の父親であることを知ると、がっかりした表情を見せられた。しかし目と額にとても良い特徴しるしを持っており、ヨーギーのようであると教えて下さった。あるとき、聖ラーマクリシュナが三昧からおりてこられたあと校長に向かつて、「全宇宙がシャーラグラマーマ(ヴィシシュヌ神を象徴した石)となつているのが見えたが、その中に、お前のふたつの目も見えたよ」と言っていた。

その当時、マヘンドラ・ナートは無相の大実在、即ちブラフマンを冥想することを好んでいて、粘土、その他のもので作った神像を拝もうという気にはなれなかった。西洋流の学問——哲学、文学、歴史、科学、政治・経済などの分野において、彼はすぐれた知識を身につけていた。また、サンスタリットのプラーナ(古代神話)、および詩、聖典の類にも彼は通曉つうぎょうしていた。クマラーサンバヴァ、シヤクンタラー、パッテイの詩、ウツタラ・ラーマチャリタなどを学び、暗誦出来るまでになつていた。ジャイナ教や仏教の哲学も学んでいた。聖書、特に新約聖書の部分を彼は大そう熱心に学んでいた。このような勉強の結果、マヘンドラ・ナートは自分をかかなりの学識者であると思つていた。ところがタクルールに最初にお会いしたときから、彼のこの高慢心は粉々になつてしまつたのである。タクルールは、彼の知識が本質的には無価値であることを知らせて下さった。そして、神を知ることが智識と名付けられるので

あつて、その他のことはすべて無智というものだ、と教えて下さつた。タクルルの二声、三声の言葉の痛棒で、マヘンドラ・ナートは沈黙してしまつた。タクルルがよくおつしやつたように——「コブラのような強い蛇に捕まつたら、蛙は一声か二声鳴いただけで黙つてしまふ」まさに、その通りであつた。

実に最初の会話で、タクルルは彼に世間の仕事をしていても、こちらとあちらを両立させることのできる方法を教えて下さつた。これを在家的サンニヤーシンへの教訓という。これの趣旨はこうである。——「どんな仕事でもしろ。しかし、心は神に置いておけ。妻、子、父、母、皆と共に住んで世話をし、外見はいかにも自分に所属している人のように扱つていても、心ではしつかりと、彼らは誰一人自分のものではない、と認識していろ」漂つていた真珠貝が、スワティー星座から落ちた水滴を受けて、底知れぬ海底に沈んで胎はちで真珠を育てるように、タクルルのこのヒントをマヘンドラ・ナートはよく理解して、心の中でも家での生活においても、森やその他の場所での祈りや修行においても、決して離すことはなかつた。人として生まれてきた目的は神をつかむことである、と心の底から理解したのである。静かな所で独り修行をすることを開始し、また休みがとれるとタクルルの足下へ通つた。彼は世間の渦に巻き込まれないように細心の注意を払い、タクルルもまた時々、彼の境地を試して下さつた。そればかりか、しばらく来ないときは何故来られないのか、その原因をお聞きになつた程である。タクルルは始めから、彼には靈的な智識タクールの教えを伝授する必要があることを知つていた。もしも彼が世俗に埋もれ、無明の渦に巻き込まれるようなことになつていれば、タクルルのお望みになることは、彼を通してはなし得なかつたであらう。

タクールは常に厳しいまなざしで彼の内外(心と外)を見通されて、どこかに世俗のしこりがあるかお探しにいられた。そして、何の心配もないのを確信されると、一八八四年一月、タクールは彼にこうおっしゃった——「もう家に戻つて妻や子供と暮らせ。家の人たちには、自分は家族のものだと思わせておくんだよ。でも内心では、お前も家族のものではないし、家族もお前のものではないことをハッキリ心得ておくんだよ」それからの全生涯を通じて、この理想——この在家サンニヤーシンのマントラを、マヘンドラ・ナートは身につけていった。彼は常に言っていたものである——“Be in the world, but not of the world.”(世間で暮らせ、しかし、世間のものにはなるな)。

タクールはまた、彼に次のおっしゃった。「お前の額と眼は、厳しい修行を積んで上がってきたヨーギーのようだ」「あたかもチャイタニヤ様のデーヴァ従順な従者の一人のようだ」「チャイタニヤ・パーガヴァタを読んでいるのを聞いたとき、お前が身内だとはつきりわかった」「校長は生まれながらに、成就者シッポクラスだ」「お前自身がどのようなものなのかわかるか?——ナーラダがサナカ、サナータナなどみんなにブラフマン智を授け始めたなら、ブラマーが呪いをかけてマヤーに閉じ込めたのだ」「お前は、すべての人たちを見分けることができるようになるだろう」「お前はわたしの身内だよ。そうでなけりゃ、どうしてお前の心がこんなにも引きつけられて、此処こゝに足繁しげく通ってくるんだい?」「マー、あなたの姿を二度見せてやって、彼を喜ばせてやっておくれ。さもなけりゃ、どうして霊の修行と世間での生活とを両立することができよう。どうか彼に両立させてやっておくれ。すぐにすべてを捨てることはないだろう? どうか、あなたのお望みの通りにしておくれ。あなたの思召

しなら、後ですべて捨てるだろうよ」「マー、彼を目覚めさせておくれ。でなけりや、どうしてほかの人を目覚めさせることなんか出来よう。何で彼を世間に置いておくんだい？ 彼が世俗にいなかったら、マー、あなたのお遊びが味気なくなるとも言うのかい？」「ナレンドラやラカールは、女の人がそばに来ると立ち上がってその場を出ていくよ。お前もそうしたらいい。お前だって、女どものそばにいるんじゃないよ」「この人はファルグ河のように底の深い人物だ。奥深くに優れたものを持っている」「お前はブラフラーダのようだ——梵我一如と神の召使いの二つの境地にいる」「校長はたいそう純粹な人だ」「この人には自惚れや高慢なところがない」「お前はわたしの身内だよ、父と子みたいなものだ。ナト・マンディル舞堂の外の柱と内の柱みたいなものさ」などなど——。

タクールと共にあつた時期、マヘンドラ・ナートの心は一つの悲しき立てられていた——なぜ自分はサンニヤーシンにならないのか、なれないのか。そうなれば心は自由な鳥のように大空を翔びまわれるだろうに——タクールは折にふれて彼を慰めて下さった——「心で捨てているのが放した人^{クテヤキギ}なんだよ。ここに來る人^クは親しい信者たちは、誰一人として世俗の人間なんかいない」「チャイタニヤ^{ヂャイザア}様の在家信者たちは、世間のことに執着せずに暮らしていた」「お前の仕事は、世俗の知恵が少なくなる仕事なんだ」などなど——。

か弱い幼児がおどおどと怖がつて、母親を最も安全な隠れ家と思つて全身の力を振り絞つてすがりつくように、マヘンドラ・ナートも家住者として生活していることの弱さ、恐ろしさから、タクールの全身全霊ですがりついていてた。そして死ぬまで、その甘露の海に入っていたのである。タクールの

話、タクールの言葉以外は口にしまつた程である。彼にとつては、タクールこそすべてのすべてであり、命であつた。マヘンドラ・ナートは完全に、タクール一色の生涯を過ごしたのだ。タクールこそ、人間として探し求むべき至上の目的である、と確信しきつて――。

その人は至高最大の宝を獲たことを知る

ここに安住すれば、いかなる困難にも動揺せず

——ギーター 6・22——

昼も夜も彼は人々に説き努めた——末世カリユガ(現代)に人間がほんとうに救われる方法を。サードゥと交わること、独りで何日か静かな所に住んで修行すること、それからグルの言葉を信じること。老年になつてからのマヘンドラ・ナートに会つた人は、彼をヨーギーカリシだと思つたにちがいない。彼はただ、ラーマクリシュナに対する信仰を縁ある人々に分かち与えながら、まるで世捨て人(隠者)のようになつて暮らしていたのだ。朝でも、昼でも、夜でも、いつ行つても彼は信仰の話をした。そして信仰者たちと共にいた。ヴェーダ、ブラーナ、聖書バイブル、コーラン、仏典、バガヴァッド・ギーター、バーガヴァタ、アディヤートマ・ラーマヤナなど、あらゆる聖典から常にいつも神のことを話して聞かせるのだつた。彼は、信仰と修行を私たちに教えるために頭れたタクール、聖ラーマクリシュナの言葉を、間断なく疲れも知らず、ただひたすらに話して聞かせたのであつた。彼は身体と心と財物のすべてをタクールの仕事に捧げて、奉仕したのだつた。これが「召使いの私」と名付ける、あのハヌマーンの態度か？

大聖ラーマクリシュナ様の召使いになるという幸運は、誰も自ら望んだことではなかつたが、しかし、実際に在世中のタクールに仕え従つた人は、間違いなくタクールの召使いなのである。彼も聖ラー

マクリシユナの忠実な召使いであり、タクルの聖なるお口から、「お前はわたしの骨肉みうちだよ。父親と息子みたいなものだ」というお言葉をいただいた。タクルは、「ナレンドラ・ナートが自分の代わりに仕事をするだろう」と言っておられたが、マヘンドラ・ナートもタクルの仕事をするだろう、という暗示を時々与えられた。それは、我々がこのコタムリトの中にとどき発見することができると——「マー、わたしはもう話せない。ラームやマヘンドラやヴィジャイたちに力を与えてやっておくれ。これたちが今から、あなたの仕事をするから——」「マー、あれ（マヘンドラ）にあんたの16分の1の力しか与えなかったのはなぜだい？ あッ、わかったよ。それで十分あんたの仕事ができるんだね」タクルが校長に16分の1の力をお授けになったので、コタムリトは世に出たのだ。校長先生にタクルはある日、こうおっしゃった——「マーが、バーガヴァタ（神の話）を学んだ人にワナをかけてこの世に置いておかなかつたら、誰がバーガヴァタを聞かせられるだろう」などなど——。

タクルの使命を助けるために来たナレンドラ・ナートに、まことに権威ある力が与えられたが、マヘンドラ・ナートにもそうした能力を父（天）から与えられた。彼もまた、父からの権威を受け継いだのだ。人々を向上させる仕事を出来るようにさせるため、タクルは時々、彼に、靈的修行をさせて鍛えた。西暦一八八三年十二月十四日から翌年の一月半ばまで、彼は南神村の大聖師ドツキネシヨルシユリ！タクルのもとに住み込んで、昼夜にわたって修行にはげんだ。タクルといつしよに暮らすことによつて、胸にこびりついていた我ゴは、徹底的ていどていどに砕け散ってしまったのである。タクルはよくおっしゃった——「この人には慢心がない」と。

彼に我執高慢の気があったならば、彼の生涯においてしたような仕事(コタムリト発刊)を、タクルールのところからいただいてくる資格はなかったであろう。その仕事——それはタクルールの言葉を多くの人々に聞かせるということである。コタムリト全五巻の中に、彼は自身を M^g という登場人物の中に隠しきって、聖ラーマクリシュナを完全に表現した。彼はいくつかの仮名を使っている——モ二、モヒニ・モーハン、或る信者、校長、M、イギリス流の一紳士……等々。著者としての個性を表現することもしていない。ごく僅かの個所で自分の考えを控え目に書いているが——それもあくまでタクルールの思想を基礎として、タクルールの偉大さを讃えるために過ぎない。彼の心には、いつもあの聖ラーマクリシュナのありのままの姿がありありと焼きついていたのである。このこと(自分を完全に拭き取っていること)については、ヴィヴェーカーナンダが読後感を一八九七年にこのように書き送った。

“I now understand why none of us attempted his life before. It has been reserved for you — this great work. Socratic dialogues are Plato all over. You are entirely hidden. (私は今、やっとわかりました。なぜ、誰も師の生涯を書こうとしなかったのか。それは、あなたのために取っておかれたのです——この偉大なる仕事は、ソクラテスの対話にはいつもプラトンがでています。でもあなたは、完全に自分を消していらっしゃる)。”

ケーシャブ・グプタ氏はこう書いている——文学作品であろうとすることが抑えられているところに、大聖ラーマクリシュナ『不滅の言葉』^{コタムリト}の真実を語るといふ力がある。夜咲く花は姿が見えず、ただ芳しい^{かぐわ}香りを放つように、著者自身を隠しきっているところにこそ、この宗教書の美しさがある。

タクールは時々、どれほど真理を理解しているか、彼をテストなさったが、そのこともコタムリトには書いてある——例えば一八八四年の十一月九日の記述等に。こうしてみるとこの仕事(コタムリト)は、マヘンドラ・ナートにとつては、することに決定していたものと思われる。マヘンドラ・ナートはタクールと共にあつたあの貴重きわまる時期に、タクールの蜜のような不滅の言葉を、そのつど詳細に日記として筆録していたのである。年、月日、曜日、白分・黒分なども漏れなく記入している。この記録を基礎にして『ゴスペル(英語で書いたコタムリトの一部)』と、ベンガル語による大聖ラーマクリシュナ『不滅の言葉』全五巻を発表したのである。この仕事は歴史的にみても例を見ないものであるし、又、アヴァターラ(神の化身)の生涯の言行(伝記)をこのような形で記したのも、他に例がない。この全く新しい形の聖書であるコタムリトについて、インディアン・ネーション紙で、N・ゴーシュ先生がまさに次のようにお書きになつた——

『They take us straight to the truth and not through metaphysical maze. The Style is Biblical in simplicity. What a treasure would it have been to the world, if all the sayings of Sree-Krishna, Buddha, Jesus, Mohammed, Nanak, Chaitanya could have been thus preserved. (これは、形而上学的な迷路を通してではなく、まっすぐに真理へと導いてくれる。平易さにおいて聖書的である。もし、聖クリシュナ、仏陀、イエス、モハメッド、ナーナク、聖チャイタニヤなどの言葉がすべてこのような形で残されていたら、どれほど世界の宝となつていただであらう)』

この仕事は他の誰かがしたとしたり、これほど純真に、ありのままのタクールを表現することはで

きなかつたであろう。Mのこの仕事には疑いもなく、タクルの御意志と恩寵が注がれているのだ。タクルはまず、マヘンドラから我^{エゴ}（著者であるという気持ち）を取り払われた。マヘンドラ・ナートが自分を隠していくつかの仮名を用いていたのも、そのためなのである。そのことは、『不滅の言葉』にもよく表れている。

マヘンドラ・ナートの口から出る言葉と態度は、どの点から見ても、タクルと共に住んでいるタクルの下僕そのものであった。そして自身は、出家としての生活をしていった。いつも言っていた言葉は——「我々の目標はただ二つ——“To be as perfect as our Father in heaven is perfect.（我々の天の父が完全であられるように完全であれ）（マタイによる福音書5章48節）である”」

タクルが捨身された後は、バラナゴル僧院^{マト}に時々通って同胞の弟子たちといっしょに過ごし、彼らの世話をしたり、共に修行をしたりして、離欲と堅固な信仰を身につけていった。時折り、神に全託する精神を養うために、極貧の人のようにカルカッタ大学のセネト・ホールの前で一夜を過ごしたりもした。また時には、インドの北西部の小屋に住んで、サードゥウのように苦行をすることもあった。また、聖地巡礼から戻ってくる人々を見るためにハウラ駅によく行つては、彼らのお御足に触れて礼拝^{プラーナイム}していたものである。そして、それらの人々からプラーサード（神に供えた食物のお下がり）を乞いうけ、もし誰かいっしょにいたならば、「プラーサードは、神さまとの交流を助けてくれますよ」と言つて、その人にもプラーサードを分け与えていた。（訳註——マヘンドラ・ナートが苦行した小屋は、リシケシのスワーク・アーシユラムに今でも存在している。マヘンドラ・ナートは一九二二年、数ヶ月滞在して苦行した）

マヘンドラ・ナートは、機会さえあればタクールのおそばにいるようにしていた——南神村ドツキネーシヨルでも、

又は、誰か信者の家においても。信者の家にタクールがおいでになったときなど、学校の昼休みのもとでさえも、会いに行っておそばにいたものである。こうして、あまりにもしばしばタクールのもとに通うので、勤め先のシャームプクルの学校における試験の結果があまりかんばしくなく、学校主であるヴィディヤサーガル先生から、「校長はパラマハンサに夢中になっているので、学校の仕事をする時間があまりないように見受けられる」と皮肉を言われたことがあった。この言葉は師の名前を引き合いに出されたので、彼はすぐに学校に辞表を提出した。後でタクールはこのことをお聞きになり、こうおっしゃった——「いいことをした。マーが雇って下さるよ」タクール、聖ラーマクリシユナは、何か必要なものがある時には、マヘンドラ・ナートにお頼みになるのが常であった。そして、「誰からでも物を受けとるわけにはいかないだよ」とおっしゃっていた。

マヘンドラ・ナートは、その物腰や態度と純朴な性質によって、ラーマクリシユナの信者仲間から大そう愛され、慕われていた。ナレンドラ・ナートが父の死後、一家の生計を負って非常に苦勞し、そのため思うように求道修行ができず、息も絶え絶えに苦しんでいた時、マヘンドラ・ナートは三ヶ月にわたって一家の生活費を負担し、彼がタクールの指示通りの修行を心おきなくできるようにしてやった。また時々、彼の母のところにも人知れず援助の資を送っていた。

大聖師シヨールの入大マヘーサマシ三昧の後、タクールの息子たちマヘーサマシ(弟子たち)はバラナゴルに一軒の家を用意し、マトマヘーサマシ(僧院、修行所)とした。スレシユ・ミトラマヘーサマシ(スレンドラ)とバララーム・ボースとマヘンドラ・ナートが特

に初期の頃、金銭的に奉仕していた。この時分、彼は二カ所の学校で教えていた——一ヶ所での収入をもつばら僧院^{マト}への献金に充^あてていたのである。西暦一八九〇年から九三年にかけて、ナレンドラ・ナートは修行のためひろくインド国内をめぐって歩いたが、それを見て、他の同胞弟子たちもヒマラヤ地方や北西部の地方に修行に出かけた。このとき、マヘンドラ・ナートは昼夜を分かたず日記に没頭して、大聖ラーマクリシュナを想いながら、大聖母^{シニョリー・マリー}（サーラターマニ・デーヴィー＝ホーリー・マザー）に帰依していた。何か判断に迷うようなことがあるとすぐに、大聖母^{シニョリー・マリー}のところへ伺つてすべてお任せするのが常であった。その当時、マヘンドラ・ナートは時々、大聖母を自分の家に招いてもなした。大聖母はマヘンドラの家に半月くらい、時にはひと月以上も滞在された。大聖母にタクールの夢のお告げがあり、マヘンドラ・ナートの家に自ら行かれて、聖水を入れる水瓶などを用意して礼拝の準備をして下さった。聖なる礼拝室で、大聖母は多くの礼拝、称名^{プージャ、ジャパ}、瞑想を行われたのである。

この家は大学通り、ターンタニヤ地区13¹³ニゲルブラサード・チョウドリー通りカルカッタ6にあり、すぐ近くにはヴィディヤサール・カレッジがある。家には師が使われた履き物、数珠、また大聖母が持つておられたシンドゥール（既婚女性が髪に分け目につける赤い粉）を入れる容器、それに足形、師と大聖母の頭髮や手と足の爪などが祀られている。朝、昼、夕の決まった時間に礼拝供養が行われている。この場所で、大聖母は多くの礼拝、瞑想、称名^{プージャ、ジャパ}をなさったのである。スワミジー（ヴィヴェーカーナンダ）や出家、及び内輪の在家の信者や弟子たちもここで礼拝を行った。Mの部屋にはタクールが着用された上着、コップ、モレスキンの肩掛け、師が信者に見せるようにと下さったチャイタニヤの絵などが飾られてある。まさにこの部屋で『不滅の言葉』^{コタムリト}は書かれたのだ。Mのこの家は、今ではベール僧院^{マト}、ウドボータン、バララーム・ポースの邸などと同様に、巡礼の聖地となっている。内外からの巡礼者が、日増しにこの地を訪れているのである。

一八八九年から、マヘンドラ・ナートは毎月定期的に大聖母に献金していたのである。大聖母もまた、何か必要なことがおきるとマヘンドラ・ナートに知らせるのが習慣になっていた。ジャガッタートリ（世界の母）供養祭を行うために土地を買う必要が生じた時も、マヘンドラ・ナートに手紙で頼みになった——土地を買うお金を送ってくれないかと。手紙を受けとるとただちに、三百二十ルピーを送った。大聖母の郷里のジャヤランパティ村が水飢饉に見舞われた時には、井戸を掘る費用として彼は百ルピー送った。また僧院の僧たちが修行の目的で旅行するときは、彼らにお金を送っていた。

以前から、この筆録を出版してほしいと多くの人が希望していた。さらにその後、その声はますます広がりを見せていた。そんな折、彼はある日大聖母に呼ばれて筆録を読んでお聞かせした。それを聞いた大聖母は非常に喜んだ。そして彼を祝福してこう言った——「あなたの口から聞いていると、私にはすべてあの方（タクル）がおっしゃっているように感じられます」そして、この本を出すようにお命じになったのです。

西暦一八九七年にマヘンドラ・ナートは英語で、*Gospel of Sri Ramakrishna* (According to M. a Son of the Lord and disciple) の初版を出版した。英語でラーマクリシュナの福音が出版されると、ラーム・チャンドラ・ダッタ氏は、ヨーゴーディヤンからベンガル暦一三〇四年オグロハヨソ月に刊行されたタットヴァ・マンジャリーにこう書いている——「尊敬するマヘンドラ・ナート・グプタ様、あなたは並外れた神への信仰をお持ちです。そして、一般の人々への教導を目的として、師のお言葉を小冊子に印刷して下さいました。我々がグプタ先生にお願いしたいことは、これらの教えの言葉を

少しずつ発表しないで一度にまとめて本にして下されば、一般の人々にとつて、もつともつとすばらしい福音となるにちがいないということです。第二のお願いは——ベンガル語を見捨てられたのは何故でしょうか？ 高遠な、しかも感情のこもった真理の言葉を英語にすると、多くの場合において、その意味がばやけて的から遠くなるということは、今さら貴殿に向かつて申し上げる必要はありませんまい。また、このベンガルの一般大衆にとつては、難解なものであります」

後になつて、その願いは実現された。大聖ラーマクリシュナ『不滅の言葉』——M筆録^グというタイトルで、タットヴァ・マンジャリー、バンガダルシヤン、ウドボーダン、ヒンドウ・パトリカ等、その当時の月刊誌にベンガル語で発表し始めたのである。その後、これらをまとめてスワミ・トリグナティーターナンダによつて、ウドボーダン・プレスから西暦一九〇二年に『不滅の言葉』第一巻が出版された。第二巻は一九〇四年、第三巻は一九〇八年、第四巻は一九一〇年、第五巻は一九三二年に出版された。インド各地の言語や外国語——実に多くの言葉でこの本は翻訳されている。読んだ人すべてがこう言っている——「ベンガル文学は値のつけようもない貴重な宝^{たから}玉を産み出した」と。ナヴィヤバーラタ紙は書いた——「M以外にこの宝を持っているものはない」と。サンジヴァニー紙は書いた——「大聖ラーマクリシュナ『不滅の言葉』は、全く甘露の宝庫だ」と。大文豪ロマン・ロランはこう書いている——「The exactitude is almost stenographic. (まるで速記録のように正確だ)」。『不滅の言葉』が発表されてから、僧院や大聖母の住居に次々と新しい信者たちが現れはじめた。『不滅の言葉』を読んで、出家の数も増えていった。苦悩の世界(世間)に、平安の泉が溢れて流れ出し

たのである。スワミ・プレーマナーナダはこう書いている——「『不滅の言葉』を読んで、何千という人が永遠の生命を獲得し、数えきれないほどの信仰家が至福の歓喜を味わい、また、どれ程の人々が世間の苦悩から救われて心の平和を得たことか——」誰もがみな、聖ラーマクリシュナはこの時代に現れたアヴァターラ（神の化身）として、人類を救うために出現なさったのだ、ということを理解することができた。このお方の御足に魂を捧げることによってこそ、人々に平安はもたらされ、また、恐れは取り除かれるのだ。

一九五五年、マヘンドラの生誕百年祭に際して、主催者代表の発言としてヘメンドラ・ブラサード・ゴーシユ氏はこう言った——「マヘンドラ氏は『不滅の言葉』の刊行を通して、極めて短期間のうちに大聖ラーマクリシュナ様のことを人々に知らせて下さった。この『不滅の言葉』を氏が発表されなかつたならば、世の人々の大聖師を知る機会はずいぶん遅れたことだろう。家住者としての義務を果たしながらも至高の真理を得ることができる、と聖ラーマクリシュナがおっしゃっていたその至高の真理は、マヘンドラ氏の中に芽を出し、花開き、実を結んだのであります」

欧米からさえも信奉者が彼の家に集まつてきた。毎日・毎日、毎月・毎月、毎年・毎年、聖ラーマクリシュナの言葉だけを彼らに話して聞かせたのである。マヘンドラはこう言うのが常だった——「私は取るに足らない人間だ。しかし、私は大洋の岸辺に住んでいる。そして水差しに、一、二杯の海水を自分のものとしている。訪問者があるときは、その水を出してもてなす。タクルの言葉のほかに、私が何を話すことなど出来ましょう」

慈愛に満ちた、魂を揺さぶるような態度で語られる言葉を聞くと、まるでマヘンドラ氏と共にラーマクリシュナのそばに坐って、直接に会話しているような気になる。あたかも、彼が坐ってタクールのことを話してくれるところと、タクールが遊戯リライを行った場面とを結ぶ橋がかかっているかのようだった。そして、その出来事が目の前に見えるような錯覚を覚えるのだった。ポール・ブラントンはマヘンドラに会った印象を、『Search in Secret India (邦題「秘められたインド」)』の中にこう書いた——『A venerable patriarch has stepped out from the pages of Bible and a figure from Mosaic times has turned to flesh (神々しい長老が、聖書のページから抜け出てきたのだ。また、モーゼの時代の彫像が、生きた人間になったのだ)』

スワミ・ヨガナンダ(タクールの弟子とは別人)は、霊的生活に入った最初のころマヘンドラを訪ねて、その時得たインスピレーションの内容を、『Auto biography of Yogi (邦題「あるヨギの自叙伝」)』という本のなかで書きしるした。

マヘンドラ・ナートは、家庭生活の中にありながらも出家僧であった。彼の生活は放棄の輝ける実例だった。Mによって記録された『不滅の言葉』コタムリトは、単なるすぐれた文学のひとつなのではない。聖なる生活における、不滅の言葉^々なのである。多くの若者が、マヘンドラ・ナートと接することによって、家庭生活というものを理解し、それぞれの宗教生活に新しい光を見出した。彼に一度でも会ったものは、彼のヨーガ行者のような姿を、彼の謙虚さと飾り気のなさを、決して忘れることはできない。

スワミ・ヴィジュニャーナナンドはかつて、「私は、僧院のおおよそ八割くらいの出家修行者は、

『不滅の言葉』を読むか、またはMとの出会いによって靈的生活に入ったのだと思う」と言っていた。スワミジーが設立した僧院ではこれからも、Mによつて語られたコタムリトを読んで、多くの修行者が神に想いを集中することに専念し、修行を行つていくことであらう。

『不滅の言葉』のいくつかの章がマヘンドラの承認や何の相談もなしに英訳され、「ラーマクリシュナの福音Ⅱ」として掲載され、又、Morning Star から出版までされた時、どれほどマヘンドラが傷ついたか、次の手紙を見れば明白である——「親愛なるアユクタ・ババジ様、わたしの愛と敬意を皆さまへ。『モーニング・スター』に掲載された福音の英訳に対して、こう言わなければならないことは非常に残念なことですが、満足のゆくものではありません。実際にタクールに会つた者として当然ながら、わたしは翻訳の中に深い精神性が感じられることを求めます。さらに言えば、タクールとの集いの報告は、こま切れで出されるべきではありません。翻訳はわたしがやるべきです。わたしが死んだ後は、その時はあなたがやりたいようになさつたらいいでしょう。それは決して遠い先の話ではないかもしれません。わたしは七十六才で体調も思わしくありません。福音があのような形で出ているのを目にするのは、大変な苦痛です。私は、あなた方が第二巻として出された本の翻訳を承認することはできません」

マヘンドラは弟子をとらず、誰にもマントラやイニシエーションを与えなかつた。ただ、タクールから受けたことを、できるだけそのままに伝えようと努力していた。彼は頑迷な狂信者ではなく、聖ラーマクリシュナが教えた真実——宗教の調和——だけを見ていた。生涯かけて、タールの甘露の

法雨を世の人々に提供するのが自分の天命だと悟っていた。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダの弟であるマヘンドラ・ナート・ダッタは、彼の著書「Mの生涯について」の中でこう述べている。

「彼は、師グルと神イシュタは一つであると考えていた。グルはイシュタであり、イシュタはグルであり、両者に違いはないと——。タクールと話をする中で、タクールのことを考え、タクールの言葉を理解するうちに、彼は外見上はマヘンドラ・グプタであったが、内面的にはまったく聖ラーマクリシュナそのものであった。

彼は自分の個性や自我を放棄して、ラーマクリシュナの作った鑄型にすべてを溶かし込むように努めた。彼にはそのほかになんの思想も、個人の独自の考えと呼べるようなものも持たなかった。彼にはタクールの教え以外のものは全くなく、又、独自の主張もなかった。彼の心は常に、ラーマクリシュナで満たされていた。あたかも、人生の目的はラーマクリシュナの影となって働くことであるというふうであった。

従ってわたしは、彼ほど個性や自己主張を捨てて自分の人生を師に捧げた人はいない、と断言することができる。タクールの教え、タクールの言葉、タクールに関する会話こそ、神に想いを集中するための、すべてのすべであった。もちろん、彼が世俗の義務を果たすときや、学校で生徒に教えるときなどは個性を表に出すことはあった。このようなことでさえ、ラーマクリシュナによって形づくられた心と態度が反映しているのは明らかであった。というわけで、Mは、実は外見はマヘンドラ・

グプタであるが、中身はラーマクリシュナそのものであったと言えよう」

ラーマクリシュナの信者のなかで、最初に師の生誕地を訪れたのはマヘンドラ・ナートであった。これは師がまだ在命中のことである。彼にとつて、そこは数ある巡礼地のなかで最も聖なる場所であった。彼は生誕地のいくつかの場所でひれ伏して礼拝し、記念としてその土地の土を持ち帰った。それを知ったタクルは、「誰かに言われたわけではなく自分からそうしたのだ」と言つて、喜びの涙を流されて、彼の頭と体を触つて祝福して下さり、「聖地の土を持ち帰るのは、深い信仰の証拠だ」とおっしゃった。タラケーシユワルのタラクナート寺院やプリーのジャガンナータ寺院に詣でた時にも、マヘンドラ・ナートは計り知れない喜びを感じたのであつた。そのときも、師は彼の頭に触れ、「お前は純粹な人間だ」とおっしゃった。

タクルの『不滅の言葉』を小冊子形式で書いて自らの天職を開始したときから、彼は身心の清淨を願つて一日一食とし、聖なる食物(ハヴィシヤ)——炊いた米とギー(純粹バター)——をとつて彼は過ごしていたのである。その誓いを、本の印刷、出版が完了するまで守り続けた。そしてコタムリト第五巻の出版が完了したとき、マヘンドラは肉体を捨てた。

タクルはよく、このようにおっしゃったものである——「バーガヴァタ、バクト、バガヴァン——聖典と信者と至聖——この三つは一つのものである」と。もしマヘンドラがこのコタムリトを発表しなかつたならば、現在のように大勢のタクルの信者はできなかつたであろう。聖ラーマクリシュナの名と共に、聖典『不滅の言葉』と、そして著者の校長ことマヘンドラの名も不滅となつたのである。

ジョイスト月の二十日、西曆一九三二年六月三日、コタムリトの仕事を終えると、マヘンドラは病に倒れた。翌朝、土曜の六時ごろ、タクールとマーの名を何度も呼んで、「お師匠さまグルデイツァ、マー、私をお膝元にお召し下さい、まし——」とのタクールへの祈りの言葉を最後に、マヘンドラ・グプタは七十八才で捨身した。あたかも、自らの意志で安らかに眠りについたような、偉大なヨーギーの旅立ちであった。

Mの神聖な身体への最後の儀式は、コシポールの聖ラーマクリシュナが茶毘に付された場所の南側の火葬場で行われた。マヘンドラ・ナートはタクールの永遠しんえの僕であり、最後に師のすぐそばに居場所を見つけたのだ。たくさんの聖ラーマクリシュナの初期の信者たちが、マヘンドラ・ナートの逝去前にマールヤーのこの世界から旅立っていた。しかし、この大切な場所は、まるでタクールによって、従者である最愛の弟子のためにあらかじめとっておかれたかのようにであった。

当時、タクールが茶毘に付された場所には、白い大理石で壇のような聖域が作られていた。Mの御廟をつくる計画が持ち上がったとき、立派に成長した彼のふたりの息子、プラバース・チャンドラ・グプタとチャール・チャンドラ・グプタは、タクール、聖ラーマクリシュナとマスター・マハーシャイ（マヘンドラ・ナート）の御廟の建立のために、自分たちで費用のほとんどを負担した。

（訳註）マヘンドラ・ナート・グプタの生涯については、SRI MA TRUST から出版されている“A Short Life of M”や、“Life of M. and Sri Sri Ramakrishna Kathamrita”などに詳しく書かれているので参照された。